

俄教師体験記

—愛媛大学農学部に 派遣されて—

農業・農村領域総括上席研究官
香月敏孝

もうだいぶ昔のことのようにも思えるが、私は平成18年4月からの1年間を四国松山で過ごした。愛媛大学農学部との人事交流による派遣である。この話が打診されたのが1月。年度末の研究とりまとめや諸会議などに忙殺され、ほとんど準備らしい準備はできなかった。紛れもない俄教師の誕生である。

この年、漱石「坊っちゃん」発表から100年。松山城の大改修が行われ、坂の上の雲ミュージアムの建設が進められていた。農学部は市の中心街からバスで東に15分ほど。一昔前であれば水田に囲まれた校舎がぼつんと見えたに違いない。今でもその面影を残した環境にある。

さて、赴任早々の授業であるが、学生

の反応はあまり良くない。いかにも退屈という表情をされるのはまだしも、わずか20人ほどの教室の前列でつぶしたまま居眠りされたのには参った。しかも女学生がである。

ややあつて、「もう慣れましたか?」とすれ違いざまに学部長。「それがどうも・」と応えてしまった。後日、飲む機会があり、二次会、三次会と連れ回され、やや目が据わった学部長がいう。「どうせ君、下手くそな授業をやってるんだろ。明日、私の授業に来なさい。200人の学生のただ1人として、居眠りさせない、私語させない。そんな授業を見せてあげよう。」

この授業、農学部に進級したての2年生全員に、わが社会科学系コースの教員が交替わりで行うもの。学部長の次が私の番だった。翌日、昼食もそこそこに、ドアごとに講堂をのぞき込む。すると怪訝な面持ちの学部長。昨夜のことなどすっかり忘れ、「どうされました?」と紳士然としている。「是非、先生の授業を拝見させていただきたいのですが」と、こちらから頼み込むことになった。

さすがに手慣れたものである。歴史の造詣が深い学部長、まずは、近世の道後平野のありようが思い浮かぶ語り口で学生を引きつける。次いで、予め読んでおくように指示したテキストの内容について、質問や感想を書かせ、それを素材に自在に授業を進めていく。傍らでは、あ

わただしくティーチングアシスタントの院生がメモを回収しては整理する。さらに、興に乗った学部長は、学生に質問を浴びせかける。

果たして翌週、私の授業である。ちょっと変わった新任教師の自己紹介、配布しておいた資料にそったテキストとその解説、このあたりまでは無難だった。ところが、やがて、ぼつりぼつりと私語がおこり、それが波紋となって広がり私の声がかき消されるまでになった。こんな時の対処方法は、後に新任教師向けの研修で教わることになるのであるが、思わず声を張り上げて「私は新任の教師で不慣れで、話し方も上手ではありません。ですから、その分よく耳を澄まして聞いて下さい」とやった。すると、今度は水を打ったような静寂である。近頃の若者の意識や行動はとらえがたいのであるが、変に素直なところがあるのも事実である。

その後も授業の準備に追われる自転車操業が続く。同科目の週2回授業という変則的なカリキュラムは新任教師には酷である。この方式は、学生にとっては、一度単位を取り損なうと次の年には他の授業とのバッティングを起こしやすい。週1回しか授業にでられない期間があるのので、補習をして欲しいと申し出た学生がいた。こちらもちょうどいい練習になると研究室に引き入れ1対1の授業をやった。次の授業ネタを使って、学生の反応

をじっくりと観察。「どこわかる?」とやりながら、ついでにはほかの先生はどんな授業をやっているのかといった情報収集に努めた。

そんなことを含め、しゃべり方、板書方法、資料の作り方を変えてみたりと、それなりの工夫はしてみた。授業後に「コニコとよく質問に来てくれた学生がいたのが励みになった。私が汚く黒板に書き殴ったものを、きれいにノートしてくれているのがなんとも嬉しい。こつした部の学生を除き、総じて反応が弱いことから、どうしても同じことを繰り返してしまっ。その分、学生からは丁寧でわかりやすいとの評価もあつたりする。学生アンケートの中に、そんなコメントがあつた。そのほか、アンケートで教育に対する教師の情熱を「強く感じた」としてくれた学生もいた。恐縮の至りである。

大学院生が行う研究会の面倒をみたことから、院生とはよく付き合った。任期切れ間近になって送別会を開いてくれた。普段、飲んでいた居酒屋よりは大いぶランクの高い料理屋である。「今日は私達が払いますから」と見栄をはる。

こちらに戻ってきて、時折、院生とはメールのやりとりをしている。彼らにとつて、私はいまだに先生なのである。